

常に新たに

第六回講演会

講演会「ダッチ・カルヴィニズム 再考」を終えて

田上雅徳

一 はじめに

カルヴァン生誕五〇〇年ということで、世界中で、ジュネーヴの宗教改革者を論じる著書やモノグラフが量産されています。嬉しい悲鳴をあげながら、新刊情報に目を通しているのは、きっと私だけではないはずです。けれども、研究水準の高まりを喜びつつ、またそれに刺激を受けつつも、間違いなく細分化と精緻化が進むであろうカルヴァン研究の今後の展開を思うとき、私自身、何か焦りの混じった戸惑いを禁じ得ません。それはちょうど、流れが急な川の岸で、片足を水に入れた人を襲う感覚のようなものでしょうか。

ニュース・
レター
第5号
アジア・
カルヴァン
学会
日本支部
2009/4/25

今回、学会の裏方
仕事を離れ、講演を
お引き受けしたのも、
上に述べたような昨
今の動向に鑑み、こ

の時点でカルヴァンにかかわる大局的な理解の必要性を痛感したからに他なりません。カルヴァンと彼に由来する精神（後者を「カルヴィニズム」ということにします）がそもそも人間の歴史の中に一体何をもたらしたのか、そのことをあらためて確認する。それをきちんと果たしておかないと、これから押し寄せてくる最先端の研究に振り回されそうな気がするのです。もちろん、このような「大きな物語」を提示することは、近年何かと評判が悪い。けれども批判的な視点を忘れさえないければ、総論というものは各論以上に、学問的自己反省の契機になるのではないだろうか。そう自分に言い聞かせて、私は準備をいたしました。

こうしたことを考えるきっかけになったのは、カルヴァンの精神的遺産というしかない、そういうものがヨーロッパ大陸の中で最も強く息づいていると語られるオランダで二年間、生活することが許されたことです。そこでは、たとえば駅の改札口の脇に置いてある日刊フリーペーパーが、オランダ人のアイデンティティをカルヴァンに求める記事を載せています。けれども、その同じ新聞が別の頁で、カルヴィニズムどころかおよそ宗教的でない社会の動きを報じてもいます。そしてこの、矛盾に満ちた「カルヴィニズム社会」を解説するヒントは、少なくとも私の手元にあった研究論文にはありませんでした。それともうひとつ、発表の用意を進めながら考えたのは、次のようなことです。講演会当日は、改革



長老主義に立つとされる教会に属するレイパーソンの参加者が見込まれていました。そういうアカデミシャンでない方々にもエンジョイしていただきながら、同時に、二一世紀にあつてカルヴァンの精神を継ぐとはどういうことなのか、それを私といっしょに考えていただき、いろんな意見を聞かせてもらいたい。こういう狙いのもとに講演では、本来個別的で様々な出来事を一定のプロットをもって語り手と聴き手双方のうちに秩序づけて取り込ませようとする、そういうナラティブの方法を採用することになりました。そして、この最後に述べた私の目論見がほぼ達成されたであろうことは、講演後活発な質

問がフロアから寄せられたことによって証明できたのではないかと思っています。この場を借りてあらためて、問題提起して下さった方々に感謝を申し上げます。また何より、デイスカツサントの労をとって下さった千葉大学の関谷昇先生からも有意義なコメントを賜ることができました。知的刺激を与えてくださった皆様への応答を今後の研究に反映させていくことが、私にできる恩返しだと思っています。ありがとうございます。

以下、感謝をもって、講演会当日にお話ししたことの要旨をお伝えすることにいたします。

二 物語としてのカルヴィニズム史、

その「主人公」と「舞台」

今回の報告では、カルヴィニズムと称される信仰のあり方のオランダという場所における来歴を物語りました。こういうと、ヨーロッパの小国に舞台を設定した、その妥当性が問われてきましよう。まず、かの地におけるカルヴィニズムのプレゼンスとそれが派生させている問題の一端については、前節で触れたとおりです。また、日本に伝道されたプロテスタント信仰の少なからぬ部分をいわゆるダッチ・カルヴィニズムが担っていたこと、これは今更いふまでもありません。私自身、このダッチ・カルヴィニズムに属する教派に属しています。そういうわけで、オランダにおけるカルヴィニズムの展開を取り上げることが、あなたがトリヴィアリズムではないはず

次に問題となるのは、カルヴィニズムという言葉の定義です。報告ではこれを「視野の広い」プロテスタンティズムだ、といたしました。つまり、宗教とは無関係だと見なされがちな文化や経済そして政治といった世俗の事柄までも、宗教改革者カルヴァンによって確認された原理原則に極力照らし合わせて把握しようとする、そういうキリスト教信仰のあり方としてカルヴィニズムを理解するわけです。こう述べるとき、いつまでもなく私の念頭にあるのはエルンスト・トレルチやマックス・ウェーバーのカルヴィニズム観ですが、それにしても、神学的には素朴にすぎる規定かもしれませんが、もっとも、『ベルギー信仰告白』第三六条以来、世俗政府が正しい神礼拝を擁護すべきだ、という理念的圧力を無視して、この信条を採用したオランダの改革派教会の歩みを語ることはできません。それをカルヴィニズムの信仰から演繹された政教一致の理想と見るかどうかはともかく、政治と宗教との密接かつ建設的な結びつきがここで自覚されていることは確かです。そして後でも触れるように、この信仰告白簡条にどう対応するかが、実に現代ダッチ・カルヴィニズムの試金石にもなります。私自身、普段はもう少し厳密な規定を心がけます。しかし今回、カルヴィニズムという物語の主人公には、五〇〇年というタイムスパンを駆け抜けてもらわなくてはなりません。そして、「劇作家」たる私は、主人公の延々としたモノローグではなく、それがいろんな歴史上の出来事に向き合いながら、成長ないしは変容を遂げていく過程を、ちよつど「ビルドアップ・ロマーン」教養小説のように聴き手に楽しんでもらいたいと目論みましたので、定義を重裝備化することはあえて避けることにいたしました。



三 近代ダッチ・カルヴィニズムの形成

こういう我が主人公が一六世紀後半以降オランダという場で根付いていこうとしたとき、大きな問題となったのは、それが全国民の中で少数派にとどまり続けた、ということでした。カルヴィニズムを奉じる政治指導者のもとに、一七世紀はじめ、オランダはカトリックスペインに対して抵抗運動を組織し、首尾よく独立を果たします。いわゆるネーデルラント連邦共和国の成立です。しかし、このオランダ国民が最もカルヴィニズムの信仰に熱心になっ

「三つ子の魂百まで」といいますが、ダッチ・カルヴィニズムのその後には決定的とも呼べる性格付与を果たしたのがこの状況だったと、私は考えます。どういふことかといいますと、何といつても「視野の広さ」に由来する神学的知への信頼がまず、この信仰のあり方の根幹をなしています。そして、現世的な事柄に対する積極的な交渉が意図されるかぎり、神学的知の果たす役割はますます大きくなりましよう。けれども、オランダのカルヴィニズムは多数派になりきれない信仰のあり方でもありません。周囲は自分たちについても賛同してくれるわけではない。こうなると、少なくとも神学者といった信仰共同体のエリートたちは、「われわれ」と「彼ら彼女ら」を区別する感知を先鋭化させ、それゆえ教会内部の凝集力に意を配るようになります。「戦時体制下」的な状況に置かれた諸共同体に共通の性格を、ダッチ・カルヴィニズムの教会も帯びた、ということかも知れません。

こうして、私たちが対象としている信仰のあり方が、知的かつ「教会的」と呼べる基本的特徴を整えたとき、歴史の中でどのようなパフォーマンスを示

アジア・カルヴァン学会 日本支部運営委員会

<http://society.protestant.jp/>

代表	野村 信
総主事	田上 雅徳
書記	関口 康
副書記・会計	鈴木 昇司
委員	弓矢 健児
委員	齊藤 美万子
委員	山澤 直晃
委員	竹下 和亮
顧問	久米 あつみ

すことになるのか。その最初の興味深い事例が、一七世紀から一八世紀にかけてのナーデレール・フォルマティ（第一次宗教改革）に見られます。これは、宗教改革期の信仰の深化を目指す、オランダにおける敬虔主義運動というしかない現象です。しかし、これが通常理解される敬虔主義のムーブメントとやや趣を異にするのは、信仰の論理によって世界を不断に把握していこうとする、合理性追求の姿勢がそこでは強く持続されたことにあります。いわば「世界の神学化」というモチーフがこの運動を貫いてきたわけで、しかもそれは、正統主義に立とうとする制度的教会に対して必ずしも齟齬をきたすことなく生き続けました。かくして、知的な「視野の広さ」が既存の教会を媒介または担保にして人々の間で共有されていく、そういう「幸福な」時期をしばらく享受できたのがダッチ・カルヴィニズムの教会でした。

ただし、時代が進むとやはりオランダでも、近代に特徴的な信仰形態が徐々に広まっていきます。すなわち、既存の制度的教会と距離を置きつつ、宗教が個々人の内面の問題を処理してくれることをほとんど排他的に期待する信仰のあり方です。ナーデレール・フォルマティ運動も一八世紀になると個人主義化していった、といわれる所以です。

四 カルヴィニズムの復興とその行方

さて、カルヴィニズムという、本来「視野の広い」信仰のあり方が、内面の問題に特化し始めた時、それはフランス革命の時期にあたりました。革命の理

念を全欧的に広げようとした（同時に、自身の野心を満たそうとした）ナポレオンによって、オランダは共和政を廃されたり、フランスの傀儡王政を立てられたりと、政治的おもちやにされます。にもかかわらず、それでもヨーロッパの大国からもたらされた自由主義の理念は、ここオランダでも少なからぬ支持者を見いだしました。かくして、宗教の論理に必ずしも依らない、新しい文化や社会の見方をオランダ国民は知るに至ります。

ところでこの時点での自由主義は、宗教を必ずしも軽蔑するわけではありません。それなりに尊重します。けれども、ここでいう尊重とは、宗教的信仰が国民各自の内面にとどまっている限り、という条件付きでした。特定の宗教的信仰が政治という公的な場にダイレクトに反映されるならば、他の宗教的信仰が不利益を被る。そしてそのことが、近代的な国民統合の支障となる。このことを自由主義は危惧したわけです。事実、オランダの自由主義は当初、カルヴィニズムの影響力によって各種の不便を強いられてきた、カトリック勢力と提携して、プレゼンスを高めています。

だとすると、オランダの近代化は原理上「視野の広い」信仰とフリクションを起こしながら進むべきものでしたし、それゆえ逆に、かの地で一定の近代化が成功したとすれば、それはカルヴィニズムが本来的なあり方を見失っていたからだ、ということになります。けれども、一九世紀の後半から、この微睡みかけていた信仰のあり方は、その本来の姿に再び目覚めます。皮肉なことに、自由主義というライバルの出現によって、です。そして、このカルヴィニズム復興を担った人物こそ、アブラハム・カイパーに他なりません。

彼は人々にあらためて、カルヴィニズムが文化の領域にまで発言権を得るものであることを訴え、その具体化としてアムステルダム自由大学を設立します。政治の領域では、オランダ初の本格的な政党「革命党」を彼は組織して、議会の場で自由主義勢力に対抗しようとしています。こうした努力を積み重ねつつ、二〇世紀初頭には首相の座にまで就くカイパーではありません。

けれども私は彼の思想に、「視野の広い」信仰のあり方を自負しつつも社会的多数派を形成できないドイツ・カルヴィニズムが抱えるアポリアの強引な突破を観察するものです。すなわち、彼の行ったことはつまとるところ、全国規模での理念の共有を断念した上で（このとき、先述した『ベルギー信仰告白』第三六条との距離の置き方が当然問題になってきます）、自分たちが抱く世界観をもって「世界」そのものを作り出すことではなかったのか、そう思われてならないのです。事実、カイパーの登場とその活躍によって、現代オランダ社会は「柱」の存在で特徴付けられる様相を帯びることになりました。すなわち、カルヴィニズムなり自由主義なりカトリシズムなり、強力ではあるが多数派形成を期待できない信念体系それぞれの世界観にもとづいて、複数のミクロな「世界」なり「社会」なりが自己完結的に形成されていく事態です。たとえば、カルヴィニズムにもとづく学校・経営者団体・労組・マスメディア・スポーツクラブなどが作られていきます。カトリシズムも自由主義も同じようなものを作ります。こうして、複数の「柱」にたとえられる世界（観）の棲み分けが一国内でなされることとなりますが、オランダ近現代史におけるカイパーの意義とは、その先鞭をつけたことにあるわけです。



しかし、彼が試みたことは今日大きく揺らいでいます。その最大の理由は、特に第二次大戦後著しくなった、いわゆる「世俗化」に求められましょう。それは、教会とそれが発信するメッセージの妥当性が社会で疑われ始めるということであり、その延長線上で、プロテスタントイニズムにしてもカトリシズムにしても、それが提供する世界観とそれにもとづく「柱」がオランダで存在意義を失っていききました。もっとも、世俗化は先進国に共通した現象です。ですので、オランダの世俗化にもしユニークさがあるとすれば、それはやはり、世俗化に直面している当のキリスト教信仰がカルヴィニズムのそれだ、と

いうことに由来しているはずですが。

たとえば今日、宗教的な信念体系におかまいなく、社会がいわゆるキリスト教信仰のヴィジョンとどんな乖離していく。このとき、問題の処理をめぐって、オランダにおけるカルヴィニズムは、たとえばアメリカのファンダメンタリズムとは異なる対応をしていると、私は思います。後者にあつては、問題となる乖離現象に対していかなる対応をとるか、それは基本的に個々の信徒に任されています。宗教にかかわる個々人の「決断」を重んじる（「ボーン・ア・ゲイン」とか「ボラントリー・アソシエーション」としての教会」という考え方は、その現れです）信仰のあり方が、そこには大きく関係しているのでしょう。だからこそ、教会の「公式見解」とは別に、信仰と現実との間にある齟齬を憤る一部の熱心な信者が過激な行動に走るということも、アメリカでは時々起こるわけです（そして、このことと、必ずしも既存のデノミネーションに行動を拘束されないテレビ伝道者が、ブ라운管越しに「善男善女」たちを政治的に動員することは、両立可能です）。

これに対してオランダでは、教会とそれが発信するメッセージがもとも「視野の広い」ものであることが、人々の宗教観の大前提になっている。したがって、かの乖離にしても民衆レベルでは、「きつとこれも教会のエリートたちは、神学的に説明可能なのだろつ」という予定調和的な楽観論の中で、受けとめられることとなります。結果、ここでは宗教的確信に由来する過激な行動はあまり起こりません。起こらないのだけどその一方で、個々の信徒が個人の責任で現実を問い直すということもあまり生じません。

こうして、およそ先進国ならどこでも直面する複

雑な社会的・科学的・道徳的問題を、オランダでは神学者たちが深遠な議論でフローしようとしていますし、そこから得られた知見は教会を通じて末端に位置する個々の信徒にまで伝達されもします。けれども、往々にして後者の側には自覚的な共鳴盤が用意されておらず、結果として、神学者たちの知見は「下」からの積極的な支持を得ないままに孤立していきまます。そしてその間にも、信仰の吟味を経ていない急激な社会変動は人々によって追認されていく……オランダでいま起こっていることは、そういうことなのではないかと私は考えています。

五 おわりに

こう見てきますと、「カルヴィニズムにもかわらず世俗化」ということではなく、「カルヴィニズムだからこそ世俗化」という力学がオランダで働いていることを、私たちは意識せざるをえません。

かつてウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、神の超越性を強調するカルヴィニズムが世界の「魔術からの解放」を遂行し、そのことが、私たちがここで「世俗化」と呼んでいる事態と近い世界の「合理化」を導き出すという思想史の逆説を描きました。これに対して私は今回、カルヴィニズムの神学の「視野の広さ」という形式的特徴とでもいべきものに着目し、同じような事象を説明できないものかどうか、考察を加えてみたということになるでしょう。

議論の仮説性は、他ならぬ私自身が最も自覚しているところです。今回の結論にしても、カルヴィニズムと同様に本来「視野の広い」信仰のあり方であ

ることを誇るカトリシズムと比較することで、修正が迫られるかもしれません。

このように、学問的にはまだまだ問題の多いストーリーですが、ある理念の歴史の中で現れたアイロニーに興味を抱いていただけたのであれば、私としても嬉しく思います。

（たのうえ まさなる 日本キリスト改革派千城台教会長老／慶應義塾大学法学部准教授 西欧政治思想史専攻）

田上雅徳「ダッチ＝カルヴィニズム再考」に寄せて

関谷 昇

カルヴァンおよびカルヴィニズムがもたらしたものと何かが。人間や社会の歴史に何を残したのか。こうした問いに心えていくことは、神学の立場はもとより、政治思想史を研究する者にとっても根本的な課題であると言えます。この課題に、田上雅徳先生は信仰の立場と政治思想史研究者の立場の双方から果敢に取り組んでおられますが、今回の講演はその取り組みを包括的観点から示したものでした。その報告内容からは、一般的に理解されるカルヴィニズムには解消されない「ダッチ＝カルヴィニズム」の

固有性を窺い知ることができず。神学には疎い私ではあっても、政治思想への大きな可能性が示されたことに大いに感銘を受けた次第です。

ダッチ＝カルヴィニズムの特徴として、本講演を通じて一貫して強調されたのは、「視野の広いプロテスタンティズム」という観点でした。それは、カルヴァンの思想ないし信仰原理に立脚しながら、狭義の神学のみならず、政治・経済・文化をも包摂して捉えようとする神学的視角であり、それが十六世紀から現在までのダッチ＝カルヴィニズムの歴史的歩みを規定してきたというものです。

この信仰のあり方の特徴として、「視野の広さ」において聖俗が密接不可分であると考えられる神学的知への深い信頼があるがあるもの、そこには教会と大衆との「あいだ」がつねに存在し続けるという側面が指摘されています。換言すれば、信仰共同体のエリアと政治社会の人々との「距離」をつねに内包せざるをえないという問題です。神学による世界把握は、大衆において信仰の深化がいかになされるかという問題を避けて通ることができませんが、人間事象の様々な領域を包摂しようとするればするほど、神学と大衆との「あいだ」も拡がります。ですから、「視野の広さ」が既存の教会を媒介としながら人々の間で共有されていく状況がもたらされたとしても、それは同時に、神学への信頼が依存にすり替わる形で、教会が人々から距離を置かれるということにならざるをえないというわけです。本報告の焦点は、この問題が歴史的文脈において、神学が人間から疎外される、ということを導いているという点にあると言えるでしょう。

田上報告によれば、敬虔主義の行方に象徴されるように、内面において純粋な信仰を追求することは、既存の制度的教会に対する関心を低下させたのであり、その教会への関心の弱化は、宗教の側に世俗への関心を後退させました。また、近代以降に定着した宗教的寛容論の流れにおいては、宗教というものが個人の内面の問題に還元されるようになり、またフランス革命によってもたらされた個人主義においても、宗教によらない規範原理や秩序原理が大きな影響力を与えました。ここでの問題は、信仰の純化と内面化とが世俗の個人主義と結びつくことにより、「教会」の地位が後退を余儀なくされたということであり、さらには世俗領域や人間の内面性が国家と直接対峙することによって、結果的に政治権力によって支配されてしまうという状況がもたらされたという点です。このように宗教が内面の問題に特化され、聖俗両領域が政治権力によって一元的に覆われてしまうことは、ダッチ・カルヴィニズムにとっては「視野の広さ」を追求したことが結果的にそれを後退させることになったというアイロニーを物語っているというわけです。



しかし、ダッチ・カルヴィニズムであればこそ、教会の復権という課題を先鋭にさせることによって、政治社会に回収されない神権政治を樹立することが貫かれます。信仰の純化のために内面性が強調されるとしても、それが政治権力による内面の支配に転移するとするならば、問われるべきは弱化された教会を国家に回収されない権威の砦として復権させることであり、独立した団体として国家統治を相対化しうる視角を確保することになります。

アブラハム・カイパーの画期性は、こうした人間中心的な自由主義と集権的な全体主義に対抗する形で、改めてカルヴィニズムの復興を果たそうとした点にあります。カイパーは、「視野の広さ」ゆえに人間や社会との緊張関係を抱え込まざるをえないというアイロニーを突破し、カルヴィニズムに新たな方向性を与えようとした。多数派になりきれないというカルヴィニズムの社会的位置やその「視野の広さ」が近代主義によって押さえ込まれるといった特殊オランダ的な問題状況がありますが、カイパーの考え方は、カルヴィニズムを国民国家規模で貫徹させるというのではなく、複数の「柱(ザイル)」の一つにおいて貫徹させるというものでした。カルヴィニズムは神の主権に立脚し、政治・社会・文化の諸領域にわたる包括的な世界観を有するがゆえに、現代的な諸問題にも対応しうると、カイパーは言います。彼が提唱した領域主権論は、家族・教会・経済・学問など社会を構成する多元的な要素には神から各々の主権が付与されていると捉えるものであり、国家から自立した柱状化社会の多元性を基礎づけたと評しうるでしょう。

ところが世界大戦以降になると、そうした柱状化社会も、迫り来る世俗化の波の中で有効性を持続す

ることが困難になっていきました。教会が抱える問題としては、やはり宗教と人間・社会との隔絶であり、教会と大衆とのギャップがあります。大衆の側は、ますます世俗化していくことによって信仰のあり方を根本的に問い質すことが弱くなり、教会の側は「視野の広い」カルヴィニズムを教導しようとする反面、その言説が抽象化することですべての事象を説明しているかのような倒錯に陥っていきます。

それが深刻なのは、政治権力がますます神格化する世俗化の拡がりにおいて、宗教的中立性の名の下にキリスト教が政治的・社会的勢力に飲み込まれ、結局は現状の追認に墮することになってしまいうことです。田上報告には、「カルヴィニズムだからこそ世俗化」がもたらされるというアイロニーにおいて、こうした信仰エリートと大衆との双方に見られる予定調和的な楽観視と現状追認の状況を根本的な問題として捉えようとする危機意識が込められていたと思います。

ここで興味深い点は、田上報告において、宗教の役割を個人の心の問題に還元する傾向にあるアメリカ的なカルヴィニズムとダッチ・カルヴィニズムとを明確に差異化していることです。前者は、個々人の内面的な自律と自発的結社としての教会が、政治権力に抗しうる基盤を形成することを強調しますが、それが個人の内面的信仰の問題に還元される傾向があるとするならば、信仰と現実とが乖離する現状において、教会の見解とは別に、信仰に基づくファンティクな行動がもたらされる可能性がありうるというわけです。言い換えれば、教会の見解が個人の内面の問題に解消されてしまい、そのことが政治権

力や社会の大衆性に回収されてしまう側面を内包しているということです。

これに対してダッチ・カルヴィニズムは、田上報告によれば、その「視野の広さ」を前提とするがゆえに、個々人の内面性に還元されない教会の異なった位置づけが指摘できると言います。ここでの力点は、信仰に基づく教会の秩序形成を自立的に問うということであり、それは教会秩序を維持しうる法と構成員の規律に対する自発的服従を通じて、信仰を追求する教会の自立性を志向する点にあります。この教会の自立性を追求していくこそが、主権国家を相対化し、個々人が政治権力に回収されてしまうことに抗しうるべきであるわけです。

しかし問題は、神学知を受けとめうる関係性が教会と大衆の間に十分な形で構築されていないのが現状であるということです。問われるべきは教会が(国家を含む)他の団体から完全に自立するということであり、今回の報告ではあまり強調されませんでした。が、団体が秩序を形成・維持しうるための「法」への服従です(田上雅徳『初期カルヴァンの政治思想』新教出版社、一九九九年)。教会の自立性が守られるためには、構成員によって自発的に遵守される「法」が必要であり、それが信仰共同体におけるエリートと大衆との間で共有される必要があります。これがなされない限り、上述したような楽観視と現状追認は免れないのであり、そこに教会としての真の課題が見出されているのだと思います。

もしそうであるとするならば、この「法」の共有は、教会法と世俗法との峻別が必要とされるでしょう。それは、一方で福音から律法への拡がりはいか

に把えるかという神学的問題を意味し、他方では霊的品格を帯びた世俗法をいかに形成しうるかという(カルヴァンの)政治思想的問題を意味します。そこに、田上政治神学が切り拓こうとするダイナミズムがあるのだと思います。

ただ、教会の自立的な秩序形成が信仰を貫徹し、結果的に世俗権力の相対化を導くというように考えるにしても、教会と大衆との「あいだ」をいかに把えるかという問題は残ります。ここで考えるべきは、カルヴィニズムが脱魔術化によって世俗的合理性を導き出したというウェーバーの図式が、「視野の広さ」を有する教会の自立的な秩序形成によってありうべき世俗の秩序形成を導き出すという図式に置き換えられるとしても、その逆説性は、ダッチ・カルヴィニズムの歴史において多様な形で存在していたのではないかということです。

例えば、カルヴァンの教えを受け継ぎつつ、アリストテレスやローマ法を受容することによって、新たな政治思想を構築しようとした十六世紀の思想家アルトジウスは、究極的には神学化されるべき現実を極めて多義的に、把えようとしていました。彼は、家族から国家に至るまで多層的に現存する様々な模様の領域に焦点を合わせ、各々の領域における信仰の共有と法の共有のあり方を模索しました。確かに、その多様な実態を把握する視角は複眼的であり、「視野の広さ」に照らして言えば、世俗的要素が強い思想だと言つこともできるでしょうが、しかし彼の思想に即せば、むしろ教会の果たすべき役割も多層的なものと考えられていたと言つことができるかと思われま

この多元的秩序に注目して、ある研究者はカイパーやドレイヴェールトらに同様の視点が継承されていると指摘していますが、重要なことは、教会の現実把握のあり方と教導する方向性の共有のされ方がいかに複数的に把えられ、いかに再帰的な側面を内包しているかという点です。「視野の広さ」は世俗化をもたらすとしても、その世俗化の実態は極めて多様であり、その多様な現実に対してダッチ・カルヴィニズムの教会はどのように向き合ってきたのか、そこに教会という存在の歴史性が見出されると思われるのです。

いずれにしましても、楽観視と現状追認との両義性に自覚的であれと訴える田上報告の視点は、信仰の立場と政治思想史研究者の立場の双方から取り組まれているがゆえの固有の視角であり、改めて教会的信仰のあり方を模索していくという見通しを示したものと言つことができます。カルヴィニズムだからこそ世俗化」というアイロニーをどのように把えていくべきなのか、神学としても政治思想史学としても、極めて大きな課題を与えられたと言えるのではないのでしょうか。

(せきや のぼる) 千葉大学法経学部准教授 西欧政治思想史専攻)



アジア・カルヴァン学会

日本支部からのお知らせ

研究活動

アジア・カルヴァン学会の二つの柱、翻訳会と研究会は双方とも続いております。前者は野村代表の留守中は細々した歩みでしたが、同代表帰国とともにとのペースを取り戻すでしょう。

後者は年二回の講演会・シンポジウムとして開催してきました。今回第七回の講演会を開くことになりましたが、今号に記されているように第六回の講演会が活発な論議を呼び、コメンテーターとして参加された関谷昇氏から「この議論をもっとつづけたい」との申し出があったので、このたび第七回講演会が実現したわけです。このように、カルヴァン研究が神学・教会史・文学・音楽等々の面だけでなく、政治思想史や経済思想史の文脈の中で捉えられていくことが会の幅を広げて行くと期待しています。

出版活動

(1) エフェソ書説教の第二弾
二〇〇九年度の前半にキリスト新聞社から出版予定です。前書は『命の登録台帳』という題名が野村代表によって付けられました。今度はどんな題名になるでしょう。

(2) カルヴァン生誕五〇〇年記念論文集

すでに大方の原稿が集まり、七月にはキリスト新聞社から出版予定です。ご期待ください。

(3) カルヴァン書簡集

エミール・ボネが編纂したフランス語の手紙を中心に、ラテン語書簡も含めて翻訳に取り掛かるので、新教出版社から本年一二月中の出版となるでしょう。

記念の催し

カルヴァン生誕の七月に、三鷹の東京神学大学において「礼拝者カルヴァン」の主題のもと、記念集会を行なうことになりました。七月六日一三時三〇分より、講演をもって始め、オルガン演奏につづき、ジュネーブ礼拝式・聖餐式を行ないます。

この会はアジア・カルヴァン学会と日本カルヴァン研究会の合同主催で、教文館、新教出版社などキリスト教出版社が協賛に加わり、教派を超えて諸教会、諸団体が協力し合う画期的な催しとなります。

会場の収容人数に限りがありますので(約二四〇名)、あらかじめ参加を申し込んでいただけると幸いです。お申し込みは FAX047-342-1576 または e-mail calvin09-tokyo@biz.nifty.jp にて受け付けています。また、この会の詳細とカルヴァン生誕五〇〇年記念カレンダーは、特設ホームページ <http://calvin09.protestant.jp/> をご覧下さい。

(久米あつみ)

会計よりのお願い

振替用紙を同封させていただきました。会費の納入、献金などにお用いくださいますようお願いいたします。該当しない方はご放念ください。

なお七月六日の記念集會に出席予定の方は、通信欄にその旨書いていただければ、申し込み確認票をお送りします。